

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第9号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 渡部研究室
発行：2018年10月13日

【 研究小論 】

“AT HAKATA” から広がる想い

高橋 栄

I. はじめに

私たちは2013年3月の例会で、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) の作品 *OUT OF THE EAST* 中の“AT HAKATA”を読み始めた。その時、少し大げさだが、ハーンの持つ自然観・生命観・宇宙観が読み取れる気がすると感じた。そして、そのような自然観・生命観・宇宙観は、私が以前読んだことがあるアメリカ作家、ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-1968) のものといささか似ていると思っていた。ラフカディオ・ハーンが生きたのは19世紀後半から20世紀初頭、スタインベックは20世紀初頭から後半までと、その時代背景は確かに違っている。しかし、この1850年から1968年の118年間には、チャールズ・ダーウインの『種の起源』が1859年に出版され、また、ハーバート・スペンサーの『第一原理』が1867年に出版されている。そしてこの2つの書物が両方とも進化を軸に構想されていて、それぞれが、スタインベックとハーンに少なからぬ影響を与えていることを考えれば、ある意味、両者は同時代を共有していたのかもしれない、と考えるのはいささか乱暴にすぎることであろうか。

いずれにしても、両者の自然観・生命観・宇宙観をのぞいてみることはなかなか興味をそそられることである。

II. ハーンの自然観・生命観・宇宙観

ハーンは、1895年に *OUT OF THE EAST—REVERIES AND STUDIES IN NEW JAPAN* を出版した。その中の“AT HAKATA”の冒頭で、人力車で博多へ向かう道すがら、ハーンは秋の田園風景を眺めながらうつらうつら夢にふける。

Suddenly and very softly, the thought steals into my mind that the most wonderful of possible visions is really all about me in the mere common green of the world,—in the ceaseless manifestation of Life.

Ever and everywhere, from beginnings invisible, green things are growing,—out of soft earth, out of hard rock,—forms multitudinous, dumb soundless races incalculably older than man.¹

そして、この世で最もすばらしい光景、ありふれた緑の世界だがそこは尽きることのない命のいとなみの世界に、自分が囲まれているという気持ちになる。さらに、緑色のものは、いつでも、やわらかな土やかたい岩の上に芽を出して成長し、おびただしい数の形となり、人類誕生よりもはるかに古くからある、物言えぬ鳴きもせぬ種となる、と考え出す。

But why they are,—that we do not know. What is the ghostliness that seeks expression in this universal green,—the mystery of that which multiplies forever issuing out of that which multiplies not? Or is the seeming lifeless itself life,—only a life more silent still, more hidden? (Hearn 73)

何故、緑色のもの（植物）が存在するのか。世界を緑でおおい尽くすその霊的なもの、つまり、繁殖しないものから出てきて永久に繁殖し続けるその神秘的なもの、とはいったい何なのか。一見、命の無なさそうなものにも、静寂な秘匿された命があるのはなにゆえなのか。ハーンの想いはどんどん広がる。

But a stranger and quicker life moves upon the face of the world, peoples wind and flood. This has the ghostlier power of separating itself from earth, yet is always at last recalled thereto, and condemned to feed that which it once fed upon. It feels; it knows; it crawls, swims, runs, flies, thinks. ... But the

meaning of it, who will tell us? Out of what ultimate came it? Or, more simply, what is it? Why should it know pain? Why is it evolved by pain?

And this life of pain is our own. Relatively, it sees, it knows. Absolutely, it is blind, and gropes, like the slow cold green life which supports it. But does it also support a higher existence,—nourish some invisible life infinitely more active and more complex? Is there ghostliness orb'd in ghostliness,—life within life without end? Are there universes interpenetrating universes? (Hearn 73-74)

彼の想いは、植物からさらに動物へと広がる。植物よりも、もっと不思議でもっと敏捷なもの（動物）は、地表を動き回り空中と水中に住み、飛びまわる霊的な力を持ち、最期には地表にもどされ、自分がエサとして喰っていたものによって喰われてしまう運命にある。その動物は、感じたり考えたりすることができる。しかし、その存在意義とは何なのか、それはいかなる根源から出てきたのか。それはなぜ苦悩を知っていなければならないのか、なぜ苦悩を感じるによって進化していくのかと、どんどん広がり、その苦悩する命とは私たちの命そのものでもあるという結論にたどり着く。そしてまた、この生命体（植物あるいは動物）は更に高等な動物を養い、更に更に、無限に活発で複雑な、まだ私たちが目にしていない生命体（飛躍してしまえば、より進化した将来の人類）をも育てるのではないか。霊的なもの（不可思議な命）は更に大きな霊的なものに包含されている、つまり、いのちは更に大きないのちに包含され、大きないのちは更にもっと大きないのちに包み込まれている。これは無限に連鎖し、宇宙そのものが、その包含し合う連鎖の中にある、という幻想・妄想へと広がる。更にハーンは次のように述べる。

May not the desire to know, as the possibly highest form of future pain, compel within men the natural evolution of powers to achieve the now impossible,—of capacities to perceive the now impossible? We of to-day are that which we are through longing so to be; and may not the inheritors of our work yet make themselves that which we now would wish to become? (Hearn 75-76)

人間の最も崇高な苦悩の形としての、真理を知りたいという願望が、現在は不可能と思われることを達成する力を、現在は不可能と思われることを感知する能力を、人間の自然な進化によって、人間の中に生じさせていくのではないかとハーンは考えてい

く。だから、現在の私たちは、そうなりたいと願望することによって、現在の私たちのように進化してきたのではないかと。将来、私たちの後継者たちは、私たちがいま願望しているように進化していかれるのではないかと、というまぼろしがハーンの心に広がっていく。

このように見えてくると、目に見えるもの見えぬものを含めた、植物や動物が身の回りにあふれていて、それらすべてが、食物連鎖も含めたいろいろな生物全体の関係性によってつながり、各々がそれぞれの仕方でのちを長らえ進化してきている、という考えがハーンの中にあることがわかる。また、その生物全般を包含している、無生物も含めた自然界全体、ひいては宇宙全体がお互いにかかわりあいながら存在している、という観念もあるようだ。人として自然の一部であり決してその例外ではなく、苦悩と願望によって進化してはいくだろうが、人は人を取り巻く大きないのち（神秘的・霊的なもの）に包み込まれた存在である。そのいのちは、更に大きなものに包み込まれて行き、その連鎖は無限に続いて行き究極的には宇宙の広がりへと、その入れ子細工を繰り返していき、というまぼろし・幻想がハーンを雲のように取り巻いているようである。

III. スタインベックの自然観・生命観・宇宙観

スタインベックは 1940 年に、海洋生物学者であり友達でもあるエドワード・F・リケッツらとともに、ウエスタン・フライヤー号という船に乗り込みカリフォルニア湾（古くはコルテスの海と呼ばれていた）へ海洋生物の採集旅行に出かけ、その結果を 1941 年 *SEA OF CORTEZ: A Leisurely Journal of Travel and Research With a Scientific Appendix* として共同出版した。その後スタインベックは、交通事故死したリケッツへの追悼文を添えて、1951 年にその作品を *THE LOG FROM THE SEA OF CORTEZ* として改訂出版した。そこには、航海日記の形をとりながら、海の生物への思いがつつられている。

カリフォルニア湾が比較のおだやかな 3 月から 4 月に、大海原や渚の潮溜まりで生物採集の作業をし、乗船している仲間たちと様々な会話をしながら、スタインベックは次のように考え始める。

This little trip of ours was becoming a thing and a dual thing, with collecting and eating and sleeping merging with the thinking-speculating activity. Quality of sunlight, blueness and smoothness of water, boat engines, and ourselves were all parts of a larger whole and we could begin to feel its

nature but not its size.²

「陽光の心地よさ、海洋のなめらかな青さ、船のエンジン、そして我々自身、そのひとつひとつのすべてが壮大な全体の一部であり、われわれは、その大きさではなくその本質を感じ始めていた」と述べている。自然という「壮大な全体」に包摂されている個という概念の芽生えがしるされている。

そして、単生のサンゴと遊泳性のヒドロムシを採取し観察して次のように述べる。

We took abundant solitary corals and laid in a large supply of plumularian hydroids, gathered carefully and preserved so that they might not be crushed or broken. These animals, in appearance at least, are so like plants that they indicate to the imagination a bridge between flora and fauna, just as some plants, like the tropical sensitive plants and the insect-eating plants, indicate by their apparent nervous and muscular versatility an approach from the other side. (Steinbeck 234)

この動物に分類されるサンゴとヒドロムシは、外見上植物そっくりなので、植物相と動物相の架け橋ではないか、ちょうど熱帯の感覚植物や食虫植物が神経系や筋肉系的な機能を発揮して動物に近似しているようにと、スタインベックは考える。また、別の場面では、「様々な微小動物を見ていると、それらを個々に記述する明確な区分が霞んであいまいになり、種と種が混ざり合うにつれて、明確に独立した種があるという考え方全体がぐらつき始め、ただ、いろいろな種が段階的に存在しているに過ぎないのではないかという思いが生じてくる(Steinbeck 207)」と述べる。このようにスタインベックは、植物・動物を問わず生物全体にかかわる種と種の関係性や連続性へと思いを巡らし、想像をあるいは幻想を膨らませていく。

スタインベックの関心は各動物間関係性・連続性からどんどん広がり、植物も含めた生物全体の関係性・連続性へと延びて行き、ついには、生物と無生物の関係性・一体性にまで及んでいく。個と個が融合し群となり、群と群が融合し集団となり、そして集団はついに全体へと包み込まれていく。このように考えることによって、全体(大自然)が潮だまりの微小動物と一本の糸でつながる筋道が見えてくる。個は孤立して存在するのではなく、全体と密接不可分に関連しているのである。そしてついには、人は密接不可分に大自然という全体につながっているという思いにたどりつく。これは、一種、神秘的・宗教的幻想なのかもしれない。しかしながら、

なかなかロマンチックで魅力的ではある。

And then not only the meaning but the feeling about species grows misty. One merges into another, groups melt into ecological groups until the time when what we know as life meets and enters what we think of as non-life: barnacle and rock, rock and earth, earth and tree, tree and rain and air. And the units nestle into the whole and are inseparable from it. Then one can come back to the microscope and the tide pool and the aquarium. But the little animals are found to be changed, no longer set apart and alone. And it is a strange thing that most of the feeling we call religious, most of the mystical outcrying which is one of the most prized and used and desired reactions of our species, is really the understanding and the attempt to say that man is related to the whole thing, related inextricably to all reality, known and unknowable. (Steinbeck 216-217)

そして、「ちらちら青光りする海のプランクトンも、回転する惑星も、拡大して行く宇宙も、すべてのものはひとつであり、ひとつはすべてである。すべては時というゴムひもでくくられている。潮だまりから星々に目を移し、また潮だまりに目をもどすことはなかなか有意義なことである(Steinbeck 217)」と結ばれる。

IV. おわりに

ハーンの“AT HAKATA”を読んだ時の感想を、いつか、スタインベックの作品につなげて考えてみたいと思っていたのが、やっとならない文章となり実現した。個々の生物から発して自然界全体に広がり、さらに宇宙にまで広がっていくハーンとスタインベックの幻想には、なにか共通するものがあるということが少しは証明できたのではないかと思う。ただ、ハーンの考えの核心には「霊的なもの(ghostliness)」という概念が存在しているように思われる。その「霊的なもの」とは何か、生命現象そのものなのか、あるいは生命現象をも包み込むもっと大きなものなのか。そして、この「霊的なもの」という観念とハーンの仏教思想への関心とはどうかかわるのか。今後も、いろいろなハーン作品を読みながら考えてみたいと思っている。

(註)

¹Hearn, Lafcadio. *Out of the East—Reveries and Studies in New Japan*. Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1895. 72-73.

以下本書からの引用は引用文に続けて(Hearn ページ数)と記す。

² Steinbeck, John. *The Log from the Sea of Cortez*. 1985. New York: The Viking Press, 1951. 151. 以下本書からの引用は引用文に続けて(Steinbeck ページ数)と記す。

【 例 会 の 記 録 】

事務局長 横山 純子

第 109 回例会

2018年6月9日(土) 14:00~16:00
島根大学学生市民交流ハウス10名参加
“My First Day in the Orient” 11.19-13.34

第 110 回例会

2018年7月14日(土) 14:00~16:00
島根大学学生市民交流ハウス9名参加
“My First Day in the Orient” 14.1-19.11

第 111 回例会

2018年8月18日(土) 14:00~16:00
島根大学学生市民交流ハウス11名参加
“My First Day in the Orient” 19.12-23.08

第 112 回例会

2018年9月8日(土) 14:00~16:00
島根大学学生市民交流ハウス11名参加
“My First Day in the Orient” 23.09-27.10

島根大学ラフカディオ・ハーン研究会は例会もゆうに百回を超え、ニューズレターも第9号まで発刊するに至りました。これまでのニューズレターの内容を次に挙げてみます。

ニューズレター第1号

著者	題	頁
常松正雄	ご挨拶	1
	ハーンと“tsunami”について	2
吉川進	的確な言葉	2-3
ヒラタ・エレナ	私にとつてのハーン	3-4
横山純子	読書会記録	4

ニューズレター第2号

長岡真吾	アテネ雑感	1-2
嵐元宏	思い浮かぶ事	2
吉川進	伯耆の小さな旅	2-3
野田泰稔	小泉八雲研究会に入会して	3-4

Saboory, Shoab

My Stay in Japan Is Full of Impressions	4	
高橋栄	フックト・オン・ラフカディオ	4-5

横山純子 読書会記録 5-6

ニューズレター第3号

横山純子	『日本警見記』の謎を追って	1-2
常松窈子	へるんさんと私	2-3
阪本成子	雑感—“Yuki-Onna”について	3-4
横山純子	読書会記録	4

ニューズレター第4号

常松正雄	ラフカディオ・ハーンの日本への帰化	1
Partin, Britany	Lingering Influence of an Obscure Literary Figure: Lafcadio Hearn's Reception in New Orleans	2-4
秦野秀子	「茶碗の中」によせて	4
池上順子	松江そして熊本	5
横山純子	読書会記録	5-6

ニューズレター第5号

池橋達雄	小泉八雲の宗教観	1-2
Murphy, Lynne	Hearn and I	3-4
横山純子	読書会記録	4

ニューズレター第6号

長岡真吾	島根大学ラフカディオ・ハーン研究会を振り返って	1-2
横山竜一郎	小泉八雲と「しゃがみ」	2-3
山崎 敬	読書会に参加して	3-4
横山純子	読書会記録	4

ニューズレター第7号

渡部知美	島根大学ラフカディオ・ハーン研究会に入会して	1
山根よし子	微笑み、「日本人の微笑み」?	1-2
横山純子	読書会記録	2-3
島根大学ラフカディオ・ハーン研究会の歩み		4

ニューズレター第8号

常松正雄	ハーンと読者と時代	1-2
林満	古き良き日本人	2-3
横山 純子	アメリカ文学史におけるハーン	3-4
横山純子	読書会記録	4

ニューズレターは島根大学附属図書館のホームページのしまね地域資料リポジトリより公開しております。どうぞそちらからご覧になってください。

編集後記：9号をお届けいたします。今回は寄稿者1人となりました。ふるってご寄稿いただくと喜びます (高橋栄)